

# コーチング

## の流儀

### 第15回

“ヨシ出し”で成長を実感させ、  
心に火をつける

埼玉県久喜市立太東中学校 演劇部 顧問 教諭 齊藤 俊雄氏



中学校の演劇部が出場するコンクールで、常にトップクラスの成績を残す学校がある。関東中学校演劇コンクールの上位入賞常連校で2017年には全国大会に出場した埼玉県久喜市立太東中学校だ。顧問の齊藤俊雄教諭は、独自の指導で部員たちを創造の喜びへといざなう。部員を楽しませながら活動を行う一方で、部員の心に火をつけることで成長を促す。その指導スタイルの骨子は全員を舞台に上げること。自ら脚本を書き、劇中では1人ひとりの部員に見せ場をつくる。部員の意見を参考に、言いにくい台詞を修正し脚本も調整する。発声や歌といった基本に加え、ダンスや殺陣、自然観察などユニークな手法を練習で取り入れて部員の興味・関心を喚起する。齊藤教諭に若年層の人材育成法と個人の成長を組織の成果につなぐために必要な指導者の心構えを聞いた。



2018年に入部した1年生部員。演劇部の公演を鑑賞したことがきっかけで、新体操やバレエ経験者も入部する

### やる気に火がつくことで人は伸びる

—演劇部の顧問になったきっかけは。

齊藤 中学校の教師は授業だけでなく、部活動も担当する必要があり、教師になった初年度はサッカー部を手伝っていました。ところが2年目に、勤務していた学校が分離することになって演劇部顧問が新設校に異動し、誰かが顧問をやらなければならず、私が手を挙げたことがきっかけです。

私は小学生のころからマジックに熱中し、大学時代には演劇にも興味を持ち、たくさんの芝居を観ていました。その経験が役に立つと思って演劇部の顧問に立候補したのですが、周囲の反応は微妙でした。中学校では文化系の部活は女子が中心なので、男性の先生が顧問になるケースが少なく、「男のくせにどうして演劇なんかやるんだ」と侮蔑の言葉を投げかける先輩教師もいました。今も25人の部員のうち、男子生徒は1人しかいません。ただ、その1人の男子部員は、ほかの女子部員と同じ魅力あふれる生徒です。私は、男子が胸を張って演劇部に入れるような状況をつくりたいと思っています。

—指導の際に心がけていることは。

齊藤 新入生には「憧れの先輩ようになる」ことを、上級生には「憧れの先輩になる」ことを目標として意識させます。やらせるのではなく、やる気に火をつけることを大切にしています。

これは私の持論ですが、人を育てることは、積

積み木を積むことに似ていると思います。積み木は1人ひとりの知識、技能などを意味します。積み木はそれぞれ色や形が違います。たとえば、赤の積み木は演技力、青はダンスの技術、緑は歌唱力とします。ある新入部員の持っている積み木が、赤い積み木1つだとします。この部員の赤い積み木が増えるということは、演技力が磨かれたということの意味です。そこに青や緑の積み木が加わることで生まれる表現は、赤だけの場合よりもずっと魅力的になると思うんです。

——積み木のたとえはおもしろいですね。

**斉藤** 少ない数の赤い積み木しか持っていない部員が集まっても、そこから生まれる表現は赤ばかりの限られたものになってしまいます。多様な活動を通して、たくさんの色と形の積み木を手に入れてもらい、部員全員の積み木を集め、そこからみんなで積み木を積み上げていくことで、豊かな表現が生まれると思うんです。指導者にできることは、部員の積み木の種類と数を増やす手伝いをして、ともに積み木を積み上げていくことだと思っています。私たちの劇づくりは、私が考えた設計図通りに積み木を積み上げることはありません。どんな建築物になるのか、ともにワクワクしながら積み木を積み上げていくんです。

今年は新体操やクラシックバレエを学んできた生徒が複数名入部しました。今までの部活にはなかった色の積み木を持った生徒たちです。この新しい色の積み木が加わったことで、どんな建築物が誕生するのか、今からワクワクしています。

指導者としては、生徒が持っている積み木を見逃してしまうことがないように、私自身の積み木の種類と数を増やすことも大切だと思っています。

## それぞれのペースで上達を実感させる

——演劇部ではどんな練習をしているのですか。

**斉藤** 発声練習や演技の稽古はもちろんですが、そればかりだと練習が単調になってしまうので、合唱、ジャズダンス、殺陣、器械運動などできるだけ多様な練習を取り入れています。

また、演劇は体力が必要ですので、基礎練習として縄跳びを取り入れています。前跳び300回から始め、二重跳び、三重跳びへと進んでいきます。

全部員が舞台上に立てるように脚本をつくる



二重跳び、三重跳びを跳ぶときの目標は過去に自分が飛んだ最高回数を超えることです。過去には二重跳びを1,000回以上跳んだ生徒もいます。四重跳びが跳べるようになった生徒もいました。

——うまくできない部員をどうフォローしますか。

**斉藤** 劇をつくりあげることは、ほかとの競争ではないと思います。「うまくできない」というのはまわりとの比較から生まれる気持ちだと思います。すべての部員が入部したときの自分と比べれば間違いなく成長しています。私は、今うまくできないことがあっても、長いスパンの中でできるようになればいいと考えています。そうは言っても、誰もが思うようにできなくて悩むときがあります。そんなときに効果があるのは「ヨシ出し」です。私たちの部活は、練習中「ダメ出し」をするのではなく、「ヨシ出し」をすることを大切にしています。先輩が新入生に向けて発する言葉は、ほぼ100パーセント「ヨシ出し」です。指導者である私は「ダメ出し」もしますが、部員の成長が見られたその瞬間に、ピンポイントで「ヨシ出し」をすることを大切にしています。

——発想がユニークですね。

**斉藤** 部の活動を魅力的にするには、さまざまな工夫が必要だと思います。私たちの練習には自然観察も含まれます。学校の周りを散策するだけでなく、ときには日光などへ遠出し、野鳥や植物などの自然に親しむようにしています。

自然の美しさや素晴らしさに感動することは、表現力を豊かにします。たとえば脚本の中にルリビタキという鳥が登場したとき、実物を知っているのと知らないのとでは表現が大きく違ってきます。また、鳥や花をていねいに観察し、それにつ

自ら手がけた脚本は全国の中学校の演劇部で演じられている



いて学ぶことで世界が広がり、それも積み木の1つとなります。私はできるだけ多くの体験を部員にさせてあげたいと考えています。

## すべての部員に輝けるチャンスがあるべき

——自作の脚本を使用するようになった経緯は。

**斉藤** 全員を舞台に上がらせたいと思ったからです。その年の部員が持っている積み木を最大限に活かす脚本が見つからなかったため、自分の手で書こうとしたことがきっかけです。太東中演劇部に伝統というものがあるとすれば、毎年生徒が替わることによってつくる芝居が変わっていくことです。私は変わることを恐れないよう心がけています。

脚本の構想を初めて生徒に話す段階では、大まかな筋と、全体の3分の2程度の役しか決まっています。この段階でやりたい役の希望をとり、役ごとの課題を与えてその数週間後にオーディションを行います。最終的な役の決定は私が行いますが、みんなが納得する選考になるように、オーディション前日までの課題練習はすべてオープンです。部員全員がそれぞれ私の前で課題を演じ、アドバイスを求めますが、誰もがその過程を見ることができず。

台詞はオーディションが終わってから書き始めます。全員が舞台に立てるように、新たな役を創設して脚本を練り直します。練習中に言い間違いなどが頻繁に起こる場合は、その台詞に修正を加えます。また部員の意見も脚本に反映させていきます。そういう意味では、部員は役者でもあり、

制作者でもあります。

私は大会で金賞をとることが第一の目的ではないと考えています。中学校演劇はあくまで教育の一環として行われるものです。部員全員がやりがいを感じ、成長することが大切だと思っています。

誤解しないでほしいのですが、私は賞を良くないものと考えているわけではありません。大会で金賞を受賞することは喜ばしいことです。しかし、金賞をとるために選抜メンバーで大会に臨むということは、私の求める方向性ではありません。金賞が取れた、取れなかったにかかわらず、今まで上演したすべての劇で部員の成長が見られました。劇を上演することで部員が成長することが、賞以上に大切なことだと思っています。

——今後の目標を教えてください。

**斉藤** あと数年で定年を迎えますが、その後も中学校演劇に関わっていきます。中学校演劇の魅力を多くの方々に知ってもらうため、その魅力を発信する仕事をしたいと思っています。一方で小説の執筆にも興味があります。やってみたいことはたくさんありますが、ずっと「教師であること」にこだわってきたので、今後も若い人の成長を手助けしていきたいと思っています。

(石川 憲二)

## 私のコーチングの流儀

### ——心に火をつけること

自分の思い通りの芝居をつくるために、部員を型にはめるのではなく、積み木を使ってどんな形ができるかわからない建築物をつくるように、部員との共同作業で芝居をつくっていきます。その作業で大切なことは、心に火をつけることです。火がついた子どもは驚くほど成長します。指導者として「ダメ出し」もしますが、それよりも「ヨシ出し」を大切にするのが私のモットーです。

### Profile さいとう としお

1960年埼玉県春日部市生まれ。立教大学文学部(英米文学専修)卒業。大学時代はマジック研究会に所属し、学生マジシャン代表としてプロと同じステージに立ったこともある。83年から埼玉県内の中学校で英語教師を務め、2年目から演劇部の顧問。翌年以降は自ら脚本まで書く創作活動を開始した。趣味は登山、旅行など。日本野鳥の会会員、緑・花文化の認定試験1級。